**「見ないで信じる者は幸い」 2016 04 03**

**ヨハネ 20:19-31 安達均**

主イエスの恵みと平安が人々の心に豊かに注がれますように！

最近の大統領選挙、ある候補者の暴言ともいえる言葉をメディアがこぞって、とりあげすぎているように思わないだろうか？

その候補の発言は、きわどい内容であり、特定の人々を中傷するもの。そのような内容は、公衆に放送すること自体、適切ではないと思わざるを得ない。わざわざメディアが、繰り返し取り上げ、何千万にもの人がそのニュースを見る時間を費やす意味があるのだろうかと思ってしまうことがある。

しかし、言論の自由や、報道の自由を大切にしている以上、まただれもがすばらしい知らせを分かちあう機会を確保する社会を保つためには、やむを得ないのかもしれない。

さて、与えられた聖書の箇所、イエスが復活した当日の夕方と、さらにその一週間後の出来事。イエスが十字架刑に架かり、遺体が墓からなくなり、復活したと聞いても、弟子たちにとって、まだまだ、本当に信じられる話ではなかった。信じられないどころか、弟子たちも、イエスと同じように十字架刑にあうのかもしれないと恐れ、震えてドアには鍵をかけ部屋に閉じこもざるを得なかった。

そこに、イエスが現れる。金曜日にはとんでもない姿で、それこそ、無残すぎて、現代でいえば、そんな姿は、絶対に放映してはならないような姿、横っ腹を刺され、つばをはきかけられ、十字架に釘づけにされ、息を引き取ったイエスだった。　しかし、そのイエスが、両手、両足の釘の後や、わき腹の傷も残したままの姿で、弟子たちの前に現れた。

しかも、イエスは、なにも助けなかった弟子たちを、責めるのでもなく、弟子たちを赦し、「あなたがたに平和があるように」という。　弟子たちは恐れは喜びに変わっていった。しかし、その場にいなかった十二弟子の一人トマスは、後から弟子たちに、その話しを聞かされる。

トマスの対応は、「そんな話しは信じないぞ。　イエスの体の釘のあとに、そしてわき腹の傷口に、自分の指を入れないかぎり信じないぞ。」と言いはった。　弟子たちより後の時代に、キリストの遺体を見ることもなくキリストの信者になった者からしてみれば、暴言ともいえそうな言葉を吐く。

一週間後だったが、イエスはトマスがいるときに、弟子たちの前にふたたびあらわれてくださった。　一回目となんら変わることなく、トマスも含めて、弟子たちを一切責めることなく、「あなた方に平和があるように。」　と言われ、さらに、トマスには、トマスに言い分に応じて、憐れみ深く接している。「あなたの手と指をそれぞれ、イエスの手とわき腹に当てるように言われる。」

トマスはそこでもちろんイエスを信じたが、ここでひとつ重要な信仰告白をしている、「わたしの主よ、わたしの神よ。」　そこには、主イエスが神であると。　さらに会話は続き、イエスはとても重要な言葉を話された。「見ないでも信じる人は幸いである。」と。

この「見ないで信じる人は幸い」という言葉、さきほどいったが、イエスの復活された時代より後に生まれて、キリスト教信者になったものは、皆、見ないで信じる者なのだ。わたしたちには、そこに祝福を感じる。

しかし、最初のトマスが、そうであったように、知的興味もあるのだろうが、紀元後、ずっとイエスの復活など信じられない方々はいる。また、すくなくとも多くの私たちが、生活している、あるいは生活していた、アメリカや日本などの国家では、言論の自由や信仰の自由も保障されている中で、イエスは救い主だなんて信じられないと言い張って、キリスト教を否定する方々がいることも現実だ。

ただ、イエスの十字架上での死と復活を信じる者は、神、主なるイエスは、徹底的に自分の造られた民を慈しみ、憐れみ、赦しておられることも信じる。人間が、信じる信じないに関わらず、神の愛は、すべての罪びとに働いている。　イエスの復活を信じない、イエスを救い主をとするキリスト教を否定する人々にも、神の憐れみは注がれている。

暴言を吐いてしまう政治家や、三位一体を否定する宗教を信じている方々も、また日々、失敗したと悩み、恥ずかしい思いを体験する私たちも含めて、神なる主イエスは赦し、慈しみ、愛しておられる。　イエスが十字架上での死と墓からの復活を通して、神の、赦し、いつくしみ、憐れみは、無条件に、すべての民に注がれていることを教えられた。　神の愛は、すべての民との間で、決して断ち切られない。そのイエスを信じて、今日も歩めることには、真の幸いがある。2000年前の当時の弟子たちやトマスにばかりではなく、今日、イエスは「見ないで信じる者は幸いである」と現代の私たちにも語っている。そして私たちに、真の幸いを人々に分かちあうように導いている。アーメン

安達均